寺村先生の思い出

白川　博之

寺村先生が亡くなられてから３カ月がたとうとしている。亡くなった直後は、先生がこの世からいらっしゃらなくなるということがどういうことなのかが実感として分からず、ただただ、驚きと戸惑いの念に支配されていたが、時が過ぎるにつれて喪失感が心の中ではっきりとした形を表わしてきた。

これから先、論文を書いても誰に読んでもらえばいいのだろう？

大学院時代の友人や先輩、先生も、いることはいる。学会のお付き合いから親しく声をかけて下さる先輩方もいらっしゃる。しかし、何の遠慮もなく、ハッキリと、私には耳の痛いことまで、言ってもらえる立場の人は、寺村先生をおいて、いなかったのだ。

実際、先生は、学問のうえでは、厳しい先生だった。レポートの評点が案外辛いことも、学生の間の共通認識であったし、折に触れて話される、「こんな研究をするといいんだが」と言うようなお話も、我々にとっては、無いものねだりという感じがあった。博士後期ともなると、合うたびに、挨拶のように、論文を書かなければだめだ、と言われる。それを言われる辛さの余り、先生の研究室から足が遠のくということもあった。

それは、阪大に転出なさってからも変わりがなく、たまにお目にかかったときなどにも、通り一遍の近況報告はほんの束の間で、話は、すぐに、「今、どんなことに興味を持っているのか」というような核心的な話題になるのが常だった。先生に再会できるのは嬉しいけれども、その質問は怖い。「フグは食いたし・・・」のような心持ちであった。

そういう、怖い存在ではあったが、私は、一度だけ、先生に褒めていただいたことがあった。大学院の１、２年のことだったろうか、新年会でお宅に伺ったおり、にこにこしたお顔で、「この間のレポート、ごっつうおもろかったで」と言われた。「ごっつう」という関西弁の語感がとても嬉しかったので、今でも忘れられない。悶々と思いを寄せていた女の子に、思いきって打ち明けて、受け入れられたような、そんな幸せな気分にしばらく浸っていたことを思い出す。そのレポートは、その後、修士論文へと発展

した。

——以上は、研究者・教育者としての先生の、正面から拝したお顔である。編集委員が私に期待したのは、むしろ、横顔の方であろう。しかし、はにかみやの先生ゆえ、横や後ろから視線を浴びせられるというのも、居心地が悪いに違いない。表の顔であるご論文を題材にして、その中に見え隠れする先生のお人柄を偲び、それで責めを塞ぎたい。

先生が引き合いに出される例文には、名文が多かった。論点を如実に体現しているというだけに留まらず、文法の議論を抜きにして読んでも、味のあるものが多い。

たとえば、次に挙げる「モノダ」の例文。（『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』より）

——女は男から好かれ、男から惚れられるものよ。
菊次はそういう。女のほうから惚れると必ず苦労する、相手のよしあしにかかわらず、男には決して惚れるものではない、というのである。
（山本周五郎「なんの花か薫る」）

先生は、よく小説を読まれていた。文学に限らず、音楽・絵画など広く芸術を愛された。

(1) a.　これはクラリネットですか。
　 b.　はい、そうです。
(2) a.　あなたはクラリネットが吹けますか。
　 b.　＊はい、そうです。　（『ケーススタディ日本語の文章・談話』より）

お宅に、モーツァルトのクラリネット協奏曲の古いＳＰ盤があったのを思い出す。

また、先生は、相撲や野球などのスポーツ観戦もお好きだった。そのため、新聞のスポーツ欄も、例文の出典となる。次は、「ノダ」の例文。（「ムードの形式と否定」）

「相撲は強いやつが勝つのではない。勝ったやつが強いのだ。」（大関貴の花）

次は、ごひいきの巨人軍の記事から採った「タ」の例。（「'タ' の意味と機能」）

八回、巨人の高田が走者を二塁に置き、左越えに大きなフライ。左翼の水谷はヘイにぴったりとつき、これをとろうとした。だが白球はグラブに入らず、スタンドからニュッとのびた観衆の両手にすっぽりとおさまった。・・・広島側は野球ルールを引いて「妨害がなければ捕球できた」と抗議。冨沢線審もこれを認め、高田はアウト。（朝日新聞）

こうして並べてみると、あの、魅惑的な授業が目の当たりに浮かんでくる。データを身近な言葉から次々に引いて提示しながら、「どうしてかしらん？」と関西弁で問い掛け、我々をいつの間にか文法のワンダーランドへといざなっていた、あの授業！

良い論文を書くことはもちろんのこと、良い授業をして文法好きの学生を育てることも、先生への追善供養の道だと思えてならない。　合掌